

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年7月第1号

「ゆゑ」と「いたる」の意味するところ

ご讃題

西の岸の上に人ありて喚ばひていはく、
汝一心正念にして直ちに來たれ、我能く汝を護らん。(Ref『大信釈』注釈版聖典 P224)
弥陀智願の回向の 信樂まことにうるひとは
摂取不捨の利益ゆゑ 等正覺にいたるなり

(Ref『正像末和讃』「第二十五首」同 P604)

摂取不捨の背景と信心のときざりと

平成二十九年度愛知上組讃仰布教大会は百九十人のお参りであった。

「初めてのお方もいらっしゃるからお話は分かり易くしたい。」

ところがこれには課題がある。分かり易くせんとすれば、お取次ぎがご法義の入り口で終わってしまっていかなともし難い。

それ故重要課題に直接取り掛かることを是とする。これが今回の方針であった。

浄土真宗は阿弥陀如来のご本願、中心が第十八願、何が誓われてあるかと言えば、

「至心信樂欲生我國」という信心と

「乃至十念」というお念仏と

「若不生者不取正覺」という利益である。

ところがここにいくつかの問題がある。

第一に、お浄土に生まれたいと想わないから関心がないのが現代の衆生である。

では、どう対処するか。斯かる衆生には「摂取不捨」のご利益のお示しがご用意されてあったのだ。これがおこたえの一つである。

善導大師のお示し下さった「二河白道(にがびやくどう)」というお喩えがある。

「二河白道」とは、百千の里を辿ってきた衆生が自分の立ち位置に気づくところから始まる。「百千の里」とは、生まれ変わり死に変わり眞實を求めてきた迷いの人生を指す。

立ち位置は、火の河水の河の真ん中に西へと通じる白道の「東端」である。

「東端」とは「娑婆の火宅」、苦惱の人生の真っ只中である。後ろからは群賊・悪獸が押し寄せ。火の河は火災で白道を焼き、水の河は波浪で白道を洗う。

これは、「われ今回(かえ)らば死せん、住(とど)まらば死せん、去(ゆ)かばまた死せん、」の三定死(さんじょうし)の上にあることを意味する。

衆生が今生の苦惱の上に立つことをいう。

そのとき、東岸にある人、釈尊の經典の勧めに会い、西の岸の人の喚ばふ()「汝一心正念にして直ちに來たれ」とのお声に励まされて白道に乗り出さんとする。

「喚ばふ」とは、喚ぶという動詞の未然形に継続を表す助動詞「ふ」を付けた用法であり、「喚び続けていて下さる」意を表す。

「一心」とは信心、「正念」とはお念仏、「直ちに來たれ」とは、行者に対しては、信心に付いては自ら意図してその構築を求めない。如来様の仰せにおまかせすることだけを求める。本願のお心からの喚び声に「直ちに來い」と求められることからそれが分かる。

「我能く汝を護らん」の「護」こそが「攝取不捨のご利益」を指す。

「攝取不捨」が「現生護念」である。愚禿抄のお言葉である（注釈版聖典 p539）。それゆえ、願文の「若し生まれずば」は、「若し、攝取不捨のご利益にあうことがなければ」と今生の苦惱の有情に向ってのお言葉と読み替えて頂戴すればよいことになる。

問題の第二は、「浄土真宗は信心一つでお救いに与る」というが、その信心が容易でない。なぜなら「浄土真宗の信心」は、「私が〇〇を信ずる」という構造ではないからである。「如来様のご本願を疑うではない」。

もとよりおみのりをお聞かせに与かるのだから「疑う気など毛頭ありません」その私に「疑ってはいけない」という。これはちょっと過ぎてはいまいか。

「疑ってはいけない」というのはネガティブ表現である。これは分かり難い。聞く者はどうしてよいかわからない。

ネガティブ表現の事態はお勧めするにも困難である。

海外異教徒・現代社会にお伝えするにはまずは何よりもポジティブ表現にできなければならない。その可能性はないのか、無いわけではない。

「我に任せよとの如来様の仰せに対して」「左様か、左様でございますか」と頭を垂れる表現方法がある。

その昔、行信教校で梯 実圓和上から承ったお言葉である。

ですので皆さん、ここで声を合わせて見ましょう。

如来様の仰せに対して、私達には「左様か」しかない。「左様か」できるだけ大きなお声で「左様か」「左様か」これが至心信楽欲生我国の中核たる「信楽」のお心である。

如来様が「我に任せよ」と仰せ下さるから「左様か」と頭を垂れて、

いつでもどこでもよしんばたとえ十編でもよいから「南無阿弥陀仏」とお念仏する。

なぜなら第十八願は念仏往生の願だからである。

念仏往生の願というのは、如来様の仰せに対して「左様か」と頭を垂れてお念仏する。

すると、私の上でご本願が働いて下さり、如来様直々のお喚び声が聞こえて下さる。

そのとき聞こえて下さったお喚び声に喚び覺まされて、これが如来様のお喚び声でござい

ましたかと頂戴する道が開ける。

「聞名」と「信心」と「称名」が即の論理で一体化された姿がここにある。

第十八願、第十七願に則ったものである。

「左様か」と云って頭を垂れるそのとき浄土往生のすべての要因が満たされている。

なぜなら浄土真宗は、如来回向の本願のみ教えだったからである。浄土往生のためには衆生が追加すべきものは何もない。さもなくば、それは本願疑惑の姿になる。

昔の人の頂戴しづりを振り返る。

あるときふと〇和上がおっしゃった。

「昔の人は有り難い、有り難い」といってお法りを頂戴して行かれたのではないか。

そういうご案内法があるのではないか。不肖は成る程そうだと思った。

なぜならお同行は教学の抽象的な論理によってお育てに遇うのではない。

期せずして妙好人浅原才市さんが残されたお言葉が脳裏に浮かんだからである。

「なむあみだぶの居り場が知れた。どをして知れた。

わしの心に、みちみちて、なむあみだぶの声で知られた。

ごをんうれしや。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」がそれである(Ref 鈴木大拙編著『妙好人浅原才市集』p15)。

煩惱成就の衆生が「左様か」とお法りをお聞かせに与るとき、かすかな喜びが胸底に芽生える。それをたよりにお聴聞を重ねるといよいよ慶びが確かなものとなる。

正像末和讃第二十五首に

「弥陀智願の回向の 信楽まことにうるひとは

摂取不捨の利益ゆゑ 等正覚にいたるなり」というのがある。

阿弥陀様から廻向された智慧のご本願のみ教えに「左様か」と頭を垂れるとき、衆生の胸には撮め取って決して捨てることのないご利益に与っているとの思いが胸底に芽生える。凡夫の旨に芽生えたかすかな感動である。

それが原動力となって、実感としてついには等正覚、正定聚不退という地位を賜っていることを有り難く味わう。

教行信証を著され信心一つでお救いに与るお法りを著わされた親鸞聖人が晩年京都にお帰りになり直面されたものこそは、

「信心ひとつで往生極楽のみちに与るといっているのは何ですか」

という関東のお同行からの切なる眼差しを伴った問いだった。

聖人は、おのおの十余箇国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふたお同行に自らのお言葉で接せられ(Ref『歎異抄』第 2 条)、更には御消息や和語のお聖教を認めてこれにお応えになった。

『正像末和讃』は、聖人八十六才の御作である。

「信益（しんやく）同時」とは言う「信」そのものについては、衆生には自ら何等の構築を求められるものではない。「左様か」と頭を垂れた衆生の相（姿）に他ならない。その瞬間、浄土往生の因が掛け目無く具っている。

本願力廻向のみ教えだからである。

ところがである。摂取不捨のご本願の謂れ、ご利益は、お聴聞を通して、時間を掛け、お育てに与ってうなずいてゆかれたと見るのが穏当である。

「ゆゑ」と「いたる」は、親鸞聖人自ら認められたお言葉、一級資料である。

その意味するところは、摂取不捨の働きに遇い得たお同行が、わが身を通して如来様のお慈悲を味わって行かれた道行きだったと見ないではおれない訳がそこにある。合掌

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会七月二日(日)十九時

仏教婦人会例会 七月十六日(日)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥